

論文の要旨

論文題目	現代日本語における可能表現に関する研究 —無意志自動詞を中心に—
氏名	呂 雷寧
学位	博士（文学）
授与年月日	平成22年5月31日

本研究は可能という観点から無意志自動詞について考察したものである。可能表現とは何か、無意志自動詞表現は何ゆえに可能表現になりにくいのか、無意志自動詞はいかなる性質があるのか、また無意志自動詞はいかなる条件下で可能表現に用いることができるのか、という問題を明らかにすることが本研究の目的である。本研究の概要は以下の5点に要約することができる。

1. 可能の形式

無意志自動詞を可能と結び付けた代表的な研究として、張（1998）が挙げられる。張は、意味を可能表現であるか否かを判断する唯一の基準として、ある表現が可能の形式を有しなくても、可能の意味を含むと捉えることができれば、それを無標識の可能表現とし、有対自動詞表現が無標識の可能表現の主流であると見なしている。本研究では、無意志自動詞について考察するにあたって、まず最初に、本研究の土台として、可能表現を記述する基準について述べたうえで、可能表現における本研究の立場を述べた。

第2章の2節では、まず、可能表現をヴォイスの文法範疇の中に位置付け、可能表現の記述において、形式と意味はいずれも無視できない重要な側面であることを論じ、可能の形式について検討した。そのうえで、可能動詞（五段活用動詞の語尾-u→-e-ruの形をとるもの）、動詞の未然形+可能の助動詞「れる／られる」、「できる」、動詞の連体形+「ことができる」、動詞の連用形+「得る」、という5つの形式を可能の形式と考えるという本研究の立場を示した。

2. 可能の意味

第2章の3節から4節にかけては、まず、先行研究の成果を踏まえたうえで、事態の実現に対する主体の制御可能性の度合いにより、可能の意味を「能力可能」、「条件可能」、「属性可能」、「認識可能」に4分類した。この分類法は、属性可能を打ち立てたことにより、従来研究対象外とされていた、非情物が主体である場合の可能を包括することができるのみではなく、有情物の能力に基づいた可能と事物の性質に基づいた可能という2つの異質のものを、別々に扱うこともできる。

次に、可能は、①動作・状態のにない手である有情物の希望、②事柄の成立に対する話者などの期待、③事柄に対する話者の判断または事物についての客観的叙述、という3つのニュアンスを含むことができることを指摘した。

そして、「(ら)れる」を用いた、有情物が積極的に関わる望ましい事柄を表す可能表現が最もプロトタイプ的な可能表現であるのに対して、「得る」を用いた、事柄に対する客観的な叙述や判断、望ましくない事柄を表す可能表現は最も周辺的なものであることを指摘した。

3. 無意志自動詞表現の性質

無意志自動詞が可能表現に用いられにくいのは、無意志自動詞の性質に起因していると考えられる。第3章では、無意志自動詞表現には次のような3つの性質があることを論じたうえで、これを裏付けるものとして、無意志自動詞表現と中国語の可能表現との対応関係を指摘した。

性質①：無意志的な状態変化を表す（数が少ない静態動詞の場合を除く）

無意志的な状態変化というのは、主体そのものの変化を指す場合もあれば、主体を取り巻く状況全体の変化として捉えられる場合もある。状態変化を引き起こす要因は大きく、動作主の関与と、事物の性質と、客観的条件の3つに分けることができる。

性質②：認識のモダリティの性格を有する

無意志自動詞表現は動詞が変化動詞か静態動詞かにかかわらず、話者の判断による事態発生の可能性を表すことができる。ただし、変化動詞の場合と静態動詞の場合の間には、前者が事物の状態変化に対する認識であるのに対して、後者は事物がある状態に存在することに対する認識である、という認識の対象における違いが見られる。

性質③：可能を含意することができる

無意志自動詞表現は動詞が有対か無対か、動作主の意図が関与しているか否かにかかわらず、可能を含意することができる。動作主の意図が潜在する場合には能力可能あるいは条件可能を含意し、動作主の意図が潜在しない場合には属性可能あるいは認識可能を含意する。

4. 無意志自動詞表現と「ことがある／ない」

第4章では、無意志自動詞表現の性質をより明確にするため、意味的観点から無意志自動詞表現と類似表現「ことがある／ない」を比較したうえで、両者の語用論的用法について考察した。その結果は次のとおりである。

①事柄生起の可能性

両者はいずれも《事柄生起の可能性》の有無について述べることができる。

②事態発生の場合

1) 肯定の場合

無意志自動詞表現は「ことがある」と同等の頻度、あるいはそれより高い頻度で発生する事態を表す。

2) 否定の場合

無意志自動詞表現：《緩やかな否定》を表す場合がある。

「ことがない」：《完全否定》

③事柄の客観性

無意志自動詞表現が事柄の客観性による制約を受けないのに対して、「ことがある／ない」は事実や客観的根拠に基づいてある事柄について述べる。

④語用論的用法

無意志自動詞表現（肯定）：戒め

「ことがある」：控え目の発話、注意、警告、婉曲的な助言、科学などの論説、商品などの説明、説得、責任逃れなど

「ことがない」：科学などの論説、商品などの説明、説得、責任逃れなど

5. 無意志自動詞の可能表現

第5章では、まず、仁田(1991)に従い、無意志自動詞を「非自己制御性を持つ自動詞」と「過程の自己制御性を持つ自動詞」に分類したうえで、無意志自動詞と可能の形式「(ら)れる」、「ことができる」との共起制限に、動詞の意志性、主体性、事態の性質という3つの要因が関わっていることを論じた。

次に、これら3つの要因がどのような形で可能表現に影響を与えているのかを考察することによって、無意志自動詞と可能の形式との共起条件を明らかにした。その結果は次のとおりである。

- ① 望ましい事態について叙述する場合、動詞の意志性と主体性の度合いが高ければ高いほど、無意志自動詞は可能表現に用いられやすい。これらの要因の度合いが最も高い条件下では、つまり、過程の自己制御性を持ち、主体の望ましい内的事態を表す場合には、無意志自動詞は「(ら)れる」と「ことができる」のいずれとも共起することができる。
- ② 一方、望ましくない事態について叙述する場合、動詞の意志性と主体性の度合いが低ければ低いほど、無意志自動詞は可能表現に用いられにくい。これらの要因の度合いが最も低い条件下では、つまり、非自己制御性を持ち、本来非プラスの受動的意味を含み、有情物の外的事態を表す自動詞と、非情物の本来的性質を表さない自動詞は「(ら)れる」と「ことができる」のいずれとも共起できない。
- ③ これら2つの中間的な条件においては、無意志自動詞は、「(ら)れる」とは共起せず、「ことができる」と共起することができる。

無意志自動詞と3つの要因との関係は次頁の図Iのように示すことができる。

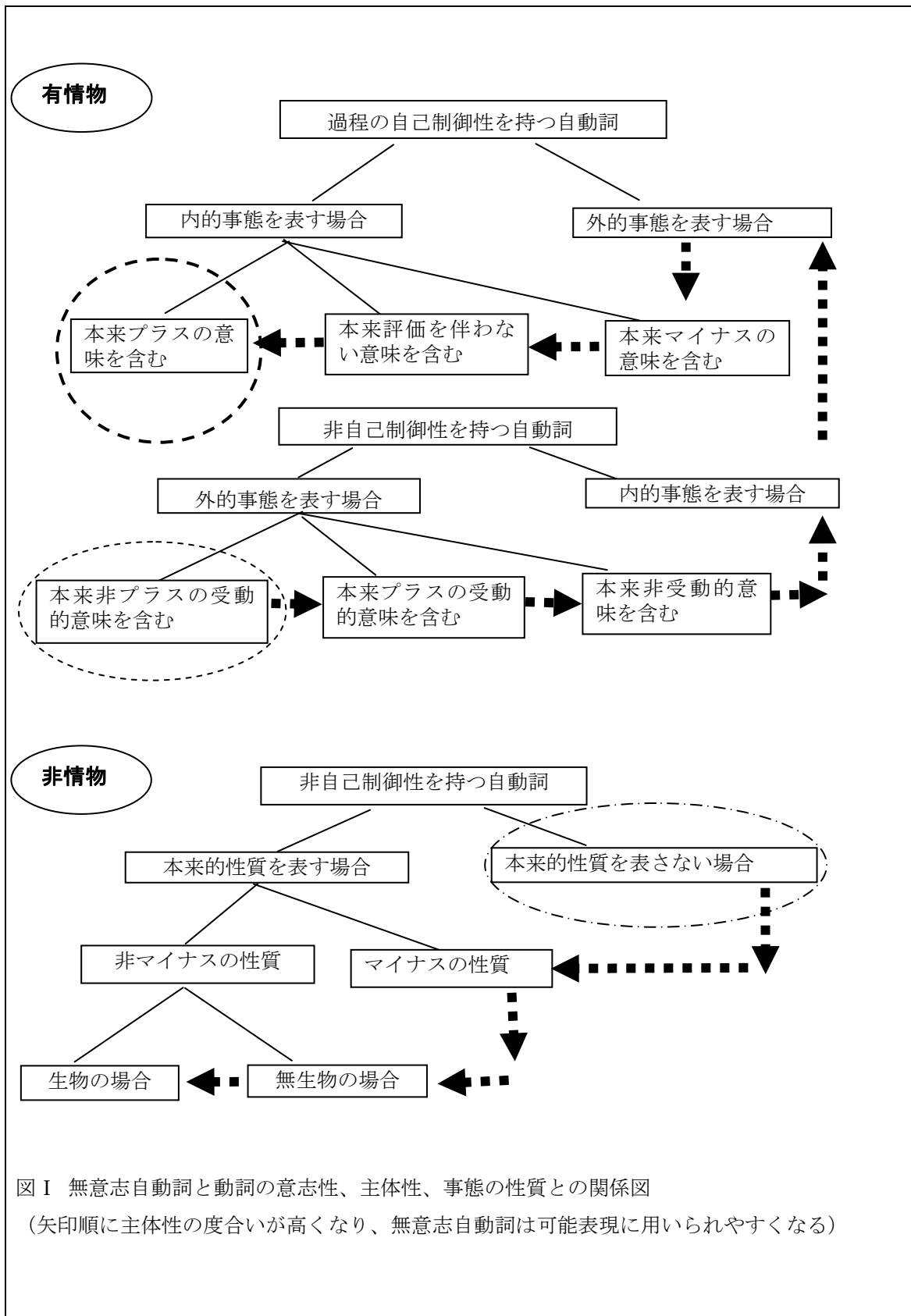


図 I 無意志自動詞と動詞の意志性、主体性、事態の性質との関係図
 (矢印順に主体性の度合いが高くなり、無意志自動詞は可能表現に用いられやすくなる)